

感動の場

『無題』

1972 年 小川原 脩 画



小川原脩は、倶知安の市街地から望む山々のなかでも、作品にしたくなる造形美をひと際感じていたのでしょう、イワオヌプリを好んで描いています。20 点近く描かれたイワオヌプリが登場する作品には、ニセコアンヌプリと並び聳える姿、その独特の山容と手前の丘陵地の光景、ごつごつとした岩肌のクローズアップなどがありますが、この作品は犬との組み合わせが面白い一点です。

春を感じるほのぼのとした柔らかな色彩が、残雪から岩肌が見え始めたイワオヌプリを包み込みます。その手前に二頭の犬が。これはじゃれ合いの果てにケンカでもしているのでしょうか。牙をむき出しにして噛みつく犬、驚きと痛みとで目を見開いた犬、犬たちの表情がユーモラスに描かれています。作品全体が醸し出す朗らかな雰囲気浸るもよし、犬たちに隠された物語性を見出すもよし、何度も味わえるおいしい作品だと私は思っています。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

冬の履物—わらぐつ—

イネのわらで編んだわらじが普通の履物だった開拓期、冬に使われた履物がわらぐつでした。材料のわらは芯が空洞のため、弾力に富み空気を多く含みます。そのため、軽いのはもちろん、断熱性があり暖かいのです。また、使っているうちに靴底のわらがけば立って、繊維が立つことで雪の上でも滑りにくくなります。軽く暖かく滑らない、雪国では理にかなった履物ですが、耐水性はほぼなく、雪解けの時期にはすぐに濡れてしまい使えませんでした。裕福な家庭では、商店から買ったようですが、多くの家庭では米俵などをほぐして手作りしていました。平面的に編むわらじより、立体的に編むわらぐつは作るのが難しく、時間も手間もかかるものでした。しかし、わらじは普通に使っても 10 日ほど、長距離を歩くと 1、2 日でダメになる消耗品だったそうなので、雪の上で傷みにくかったわらぐつも長持ちはしなかったでしょう。

昭和初期頃まで使われたわらぐつに代わり、冬の履物になったのがゴム長靴です。大正時代には普及し始めましたが、原料のゴムが輸入に頼り高価だったため、まだまだ庶民には手の出ない品物でした。昭和 36 年版倶知安町史に「大正 5、6 年、デンプンや青エンドウなどの豆類が高騰し、それらを取り扱う雑穀商は大変景気が良かった。雑穀屋の若い衆は親方にゴム長靴を買ってもらい意気揚々と歩いた。それがハイカラの先端をゆくものだった。ゴム長靴を履いて歩けるのは雑穀屋だけだったという」と書かれています。寒さ厳しい豪雪の地に住むものとして、デザイン豊富で高性能な今の冬靴にありがたみを感じます。

文：森脇 友行（倶知安風土館 学芸補助職員）



ふるさと探訪

455 回

展覧会のお知らせ

■第 1 展示室

本庄隆志展「イメージのコラージュ」

函館市出身で倶知安町在住の画家・本庄隆志さん初の回顧展。これまで当館で開催されたグループ展への出品を通して地域の美術ファンにはなじみ深い作家である本庄さんの、練られた構図に心象を丁寧に描き出す 1980 ～ 90 年代の作品や、静かな視線で周囲の自然を捉えた近作など 20 数点を紹介します。札幌、函館、そして倶知安へと活動の場を移しながら、その時々風景と心象を重ね合わせ、具象と抽象を行き来しながら紡ぎ出される絵画世界の全貌をご覧ください。

会 期：開催中～ 4 月 18 日(日)



■第 2 展示室

小川原脩展「《森の入口の白い樹》と北の動物たち」

戦後、故郷・倶知安で創作に打ち込んだ小川原脩の主要なモチーフとなったのは馬・犬・オオハクチョウなどの動物と伸びやかな姿の「北の動物たち」でした。アトリエから数キロ歩いた先で出会う、神秘的なダケカンバに抱かれ、キタキツネ、フクロウ、リスなどが織り成す静謐な空間―「森の入口の白い樹」の連作を中心に、小川原脩が描く北の動物たちを紹介します。

会 期：開催中～ 4 月 18 日(日)

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン※いずれの回も映像ルーム（無料）で定員 10 名

世界のグレートアーティスト (9)

「静物画～欧州における変遷」

日 時：3 月 6 日(土) ① 14 時 ② 15 時 お話し：柴 勤（館長）

アート・シネマ館

「アンディ・ウォーホール」2005 年（81 分）／フランス

日 時：3 月 13 日(土) 14 時～ お話し：柴 勤（館長）

ユネスコ世界遺産 (8)「大地のパノラマ」

日 時：3 月 27 日(土) ① 14 時 ② 15 時 お話し：柴 勤（館長）

■ミュージアム・コンサート

「チェンバロで聴く日本と世界の歌」

道南を中心として幅広い活動を展開するチェンバロの森洋子さんとソプラノの次藤正代さん。ヘンデルなどバロック時代の名曲から日本歌曲まで、一足早い春の訪れをお楽しみください。

日 時：3 月 20 日(土) 14 時～ 会 場：当館ロビー（無料）定 員：30 名（予約制）

出 演：イル・テアトリーノ（森洋子さん・次藤正代さん）

予約受付：3 月 3 日(水) 9 時から電話申込（☎ 21 - 4141）※新型コロナの状況により延期・中止の場合有

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館 ☎ 21-4141

観 覧 料：一 般 500 円（400 円）
高 校 生 300 円（200 円）
小中学生 100 円（50 円）

倶知安風土館 ☎ 22-6631

観 覧 料：一 般 200 円（100 円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は 9 時～ 17 時

入館は 16 時 30 分まで

※（ ）内は 10 名以上の団体料金

3 月の休館日 毎週火曜日

美術館でアートフェア？

札幌芸術の森美術館では、先月まで「札幌ミュージアム・アートフェア」が行われていました。アートフェアとは、さまざまなギャラリーが一堂に会し、それぞれが推奨する作家・作品を紹介する「アートの見本市」。ギャラリーや作家、お客さん、美術関係者などの交流の場にもなります。ですが作品の売買が主たる目的ですので、公立の美術館が主催することはまれなこと。ただ今回は、アートマーケットの視点から北海道美術を展望しつつ、コロナ禍により発表の機会を失った作家を支援するという、今の状況に即したものでした。

館 長 柴 勤